

ある趨勢と共に、その基礎をなす根本史料の集大成の印行が續々企劃實現されてゐるのは斯界の爲め誠に喜ばしき現象である而して最近に至り史料大成及び鹿苑日録の刊行が始められたのである。

嘗て藤原氏攝關時代の貴重なる日乘記録が笹川種郎、矢野太郎兩氏の努力によつて集成され、所謂史料通覽として公刊された。しかしこの史料通覽は當初の計畫を完成せずして、十八卷を以て中絶の止むなきに至つた。史料大成は再び笹川、矢野兩氏の校訂によつて、未完成の史料通覽を増補完成せんとして全三十卷に編纂されたものである。即ちこの公刊事業大成の曉には、先に未完成に終つた小右記、長秋記、兵範記、勘仲記等は完結し、更に新に吉記、吉綴記、平戸記、妙槐記、三長記、康富記等を加へて、藤原時代から鎌倉室町時代に至る大記録集が出現する譯である。

鹿苑日録は言ふ迄もなく相國寺塔頭鹿苑院々主の日記を集成したもので室町時代の長享元年から江戸時代の慶安四年に至る上下約百六十五年に亘る浩瀚な記録である。而して禪僧が當代の有力なる文化荷擔者であつた關係上、本書の内容は當時の禪苑に關する好資料たるは勿論、政治、經濟、藝術等各方面の史實を豊富に持つてゐるのである。しかし原本は既に關東大震災に灰燼に歸し、寫本とても大學等に便宜あるもののみが利用し得る有様であつた。然るに今本書全七冊として、辻善之助博士等の校訂により、既に第一回の配本を終へたのは、かゝる便宜

に浴し得ざりし研究家にとつて大なる福音である。のみならず内容廣汎なる本書の索引が附加せられるとの事は、利用者にとつて一層の便益であらう。

我等は以上の兩集成が綿密なる校訂を経て、着々上梓完成されることを願ふものである。(史料大成、全三十冊、一冊三・二〇、内外書籍株式會社發行、鹿苑日録全七冊、一冊三・八〇、太平洋發行)(以上時野谷)

●民 間 傳 承 論

柳田 國 男 著

書肆共立社の刊行する「現代史學大系」中の一冊として、この書は早くよりわれわれの最も切に待望せるところであつた。蓋し、民俗學の概論としてバーンのハンドブックやジュネツプの小著は既に譯出されて、此方面の良書の少きを補つてはゐたがわが國に於けるこの學問の眞の創設者であり不斷の指導者であるところの柳田國男氏が自らの永き體驗と眞摯なる反省とを基として、この研究の意義目的領域並に方法の全般に亘つてその概要を示されることは、内、斯學に従事するものにとつて兎もすれば見失ひやすい全體への關聯とその方向とを示し、外、これと隣接する姉妹學科の研究者に對し、往々最も把み難いとされるその正しい輪廓とその實體とを得せしめるものとして、今日なほ依然として「謙遜なる無責任」と「好意の輕侮」の下におかれてゐる斯學にとつて最緊要事と考へられるからである。

勿論柳田氏のこの學問に對する抱負とそのシステムとは必ずしも今日まで聞かれなかつたわけではない。手近く氏の「郷土

「研究十講」や神宮皇學館に於ける夏期講演の筆記等に於てもその大要は窺ひうるばかりでなく、氏のものせらるゝ論文には如何なる小編にても常に一貫した主張と、全體系への關聯が見出され氏に對する、われ／＼の論ることなき尊敬も實にその點に繫つてゐるのであるが、今この書はそれらを一層組織的に、且詳細に示して最もよくわれ／＼の期待に協ふものである。今簡單にその内容を一瞥するならば――

民間傳承論の名は斷るまでもなくフオクロアの譯語としてあり、その概念はほど彼と互に相覆ふべきものであるが、著者は彼の語が、諸外國に於てあまりに廣く多方面に適用せらるゝに對して、寧ろ之を一國(或は自國)民俗の研究に限つて用ひ、他民族の土俗の研究は殊俗誌(エスノグラフィ)として一應之と區別せらるべきであるとする。蓋し、獨逸學界に於ける *Volkskunde* 及び *Völkchenkunde* なる二語の用例に倣ふものであつたかゝる區別のなさるべき所以は、後の章に於て研究範圍の三方面を分つに當りその一つとしての心意現象が同郷人の同情共感に倣つて始めて正しく理解せられるものであることを説かれるに至つて最も明瞭であるが、然もそれは要するにこの學問の現在の若さに於てする研究の順序よりいはるゝことであつて一國民俗學と殊俗誌とは、共に一つの人類の自己自身を知る爲の學としてその目的とするところは一つであり、互に相提携して究極は世界民俗學に統一せらるべく、その可能性は既に兩者の進歩の上に約束せられてゐるのである。

著者はこの博大なる理想の上に立つて現在の史學や考古學のなすところを批判し、それらが以て研究資料となすところの文字あるもの、形あるもの、外に一層廣く書契以前、形相以上の世界のあることを指摘し、そこに至る道として現在の生活現象に於ける直接なる事實の採集を擧げる。即、著者によれば、今日の世相はそのまゝ、歴史の一横斷面であり、古き思想や慣習の露頭は到るところに見出される、その面に於てわれ／＼が自らの耳目を以て直接に經驗せる事實こそ民間傳承論の基礎である、それは單に文獻的資料の補足或は延長といふが如きものではなくして、却つてそれらの根柢となり、その上にあらゆる記録の意味が考へ直さるべき所のものである。かゝる見地の下に著者は最も實際的な文庫作業の用意を説き、採集と分類とに就てその方途を教へられる、この部分こそ實に永年に亘る著者の體驗と苦心に基くもの、最も独自の創意に満ちて、言々皆傾聽すべきものを有つてゐる。例へば資料の分類について、手近く採集の自然の順序に従つて目に映するもの、耳に聞こえるもの、心意感覺によるもの、三部門となし、夫々配するに生活語相習俗、言語藝術、傳説及說話(口禱)並に心意現象(俗信)を以てするが如き、一見極めて恣意的なるが如くに見えて、その實その部類は概ね諸外國に於ける試案とも一致し、われ／＼が實地の採集に當つて最も適切なるか感するであらう。更に各部門に於けるデータの整理に際して方言による索引の法を推奨せらるゝが如きも亦一に著者の發案であり、その可能と效用とは今日ま

でに著者自らによつて部分的に發表せられた民俗語彙（山村語彙、流村語彙、常民婚姻資料、年中行事調査標目その他）によつて既に十分に證明せられてゐるのである。

最後にこの書はその成立の機縁からいへば第一章並第二章の一部をのぞき著者自らが直接に筆を執つたものではなく、その口述を郷土生活研究所の同人たる後藤興善氏が筆記し適宜章節を整へられたものであるが、よく著者の文章のもつ格調を傳へ全體を通じて存する著者の情熱をさへ感ぜしめるものがあるのは平素著者に親炙せる筆記者にして始めて能くするところ、然もその苦心は必ずや並ならぬものがあつたであらう、このかくれたる勞苦は讀者の心からの感謝に値するものと思ふ。（菊版二九〇頁、東京共立社發行、定價二・二〇（柴田））

●日本國民史

齋藤 斐 著

大正九年に刊行された日本國民史が關東大震災の厄に遭ひ、其の原版を焼失したために絶版となつて既に十餘年を経過し、其間に於ける國史學の進歩は、わけても著しいものがあり、加ふるに考古學や民族學の方面に新しい研究が頻りに發表さるゝ所があつた。さるが故に學に忠なる著者は、舊著の不備を補ひ、足らざるを満たし、舊きを捨て、新らしきを採り、煩冗を省いて、簡素を豊かにし、且つ舊著とは違つて全然新しい組織の許に編述して世に問はれたものが本書であつて、上下二冊に分れる。合して千四百頁、初めのものが六百四十頁にすぎなかつたのと比して、分量の上から言つても舊著の二倍に達する

以て改訂の一斑を察する事が出来るであらう。改訂と言ふよりも寧ろ新著に等しいものである。

其上卷は緒論から始まつて室町時代に及び、六百三十數頁之に宛て、下卷は安土桃山時代から昭和の御代に達して千二百七十頁之に宛て、ある。古きに簡にして新しきに密なる編纂は第一に賛成の意を表する。殊に明治以後の歴史に力を注ぎ昭和の現代にまで説き及んでゐるのは、類書の中でも傑出したものであらうし、現代史の少い現狀にありては、これだけでも大きな仕事であつたらう。がしかし望蜀の言を發する事が許さるゝならば、その註として諸條約や詔勅の全文を擧げる代りに、明治以後の科學の發達、資本主義の發展、産業組織の變革等の方面に、もう少し筆が費してほしかつた。現代史に於て最も必要な事は、政治外交史でなくして、明治二十年頃以後の社會經濟産業の方面であつたと思ふ。此の事は他の時代にも言へると思ふのであつて、國民史である以上、更に國民の生活、國家全體の精神生活の方面に言及してほしい所があつた。

乍併、その全體に亘りての組織は極めて整然と準備されて居り、あらゆる問題に向つても一應の解答が出されて居り、殊に卷末に親切な索引までも附けられて居るのであるから、一般の人士が國史の如何なるものであることを知らんとするには、何よりも好參考となるであらうし、就中、高毅な受験のためにはなくては叶はぬ指針であらう。（定價上卷四・八〇、下卷五・二〇、東京神田賢文館發行）（中村）